

# 反義化と語義墮落

---

前田 満

---

## 1. 序 論

時とともに語や表現の意味が変化し、本来とは逆の意味を表すようになることがある。よく知られた例に、silly「愚かな」がある。この語はもともと「祝福された、立派な、敬虔な」といったポジティブな意味をもった語であった。現代英語（PE）の silly には、この時代の面影はほとんど見られず、もっぱら侮蔑語としてのみ使われている。つまり、古英語（OE）の時代から現在にいたる間に、silly の意味は大ざっぱな意味において「反対」になってしまったのである。本稿では、便宜上、この現象を「反義化」（antonymization）と呼ぶことにする。<sup>1</sup>

後述のように、反義化は通言語的に見られる意味変化のパターンなので、一見したところとても規則的な印象を受ける。しかし、本論では、Keller（1994）の提案する言語変化の「見えざる手」理論（invisible-hand theory）を援用し、この見た目の規則性が人間の行動原理や認知的傾向といった言語外的な要因の相互作用から偶発的に生ずるものだと主張する。本論は、Milroy（1992, 1993, 2003）や Mufwene（2001, 2008）など社会言語学的アプローチにしたがって、この問題を話者の言語行動とその社会的・認知的背景という観点から追求する。また、本論では、反義的な意味がこれらの要因の相互作用から偶発的な累積効果として生まれるその発達プロセスの再現を試みる。

本論の構成は以下のとおり。第2節では、英語史に見られる反義化の例をあげて簡単な解説を加え、それらを他の言語の例と比較する。続く第3節では、おもに本論の分析の理論的背景をなす Keller（1984, 1994, 1995, 1997）の「見

えざる手」理論の骨子を述べる。第4節では、この理論を用いて、silly タイプの反義化のプロセスを再現し、変化の原因を明らかにする。第5節は、本稿の簡単なまとめである。

## 2. 反義化

おそらく英語史上に見られる反義化の例として最もよく知られるものは、silly「愚かな」の発達だろう。この語は古英語の *sælig*「幸福な」に由来し、中英語期（ME）以降、しだいにネガティブな意味を発達させた（cf. Bradley（1955 [1904]）, Steinmetz（2008））。<sup>2</sup> 寺澤（1997：1281）によると、silly の「愚かな」という意味が定着するのは16世紀以降で、その初期の例は Shakespeare の作品中に見られる。そのいくつかを（1）にあげた。

- (1) a. This is the *silliest* stuffe that euer I heard. (*A Midsummer Night's Dream*, 5. 1. 1909)
- b. The *sillie* boy beleeuing she is dead claps her pale cheekes ... (*Venus and Adonis*, 467)
- c. ... why, thou *silly* Gentleman! (*Othello*, 1.3. 592)

この時代の silly には、「愚かな」の他に、「無邪気な」「貧しい」「無力な」といったいくつかの意味があり、現在よりもはるかに多義的であった。そして時とともに後者の意味が廃用になり、最終的に「愚かな」という意味だけが残されたのである。つまり、反義化といっても意味が文字どおり「反対になった」のではなく、多義的な状態をへて、最終的に反義的な意味だけが残されたと考えるべきである。

silly の辿った変化と並行のものとして、egregious「悪名高い、ひどい」や blessed「呪われた」などがあげられる。寺澤（1997：133）によると、後者が反義的に用いられるのは19世紀からなので、これは比較的新しい発達である。前者は借入語で、もともとラテン語の *ēgregius*「傑出した、すばらしい」に由

来する。寺澤（1997：417）によると、ネガティブな意味は16世紀から生じ、それとともにポジティブな用法はしだいに廃れていく。例えば、Shakespeareの*Cymbeline*の次の用法は明らかにネガティブな意味をもっている。

- (2) Aye me, most credulous Foole, *egregious* murtherer, theefe, any thing ...  
(5.6. 3017)

他言語にも、sillyのタイプの反義化の例が散見される。例えば、ドイツ語のalbern「愚かな」(cf. ein *albernes* Benehmen「愚かなふるまい」)もOHG alawāri 'all-true'に由来し、かつては「優しい、親切な」という意味であった。同様に、フランス語のbenêt「愚かな」(cf. son grand *benêt* de mari「彼女の愚かな夫」)がラテン語のbenedictus「祝福された」に由来するのまさしくsillyと同じである。日本語の〈おめでたい〉'blessed, blissful'の発達もこの範疇に属する(第4節)。ちなみにsillyと同根のドイツ語selig「幸福な」にはネガティブな意味はなく、現在もOHG sâlig「幸福な」と同じポジティブな意味を維持している点が興味深い。

さて、sillyのタイプの反義化は、語の指示物の価値が下落するという意味で、一般に「語義墮落」(pejoration)と呼ばれる意味変化の1例である(注1を参照)。語義墮落は、どの言語でも見られるありふれた現象である。例えば、churl「無作法な人」(<OE ceorl)の元来の意味は「自由人」だが、「最下層民」「小作農」といった意味をへて現在のネガティブな語となった(Hock and Joseph(1996:243))。また女性語は男性語にくらべて語義墮落を受けやすい(cf. Romaine (1994:105ff))。例えば、hussy「自堕落な女」はOE hūswīf「主婦」に由来し、wenchも単に「若い女性」から「売春婦」となってしまった。さらに現在は蔑称と化してしまった日本語の〈貴様〉も、もともとは貴人に対して用いる尊敬語であった。

この語義墮落と逆方向の意味変化は、一般に「語義向上」(amelioration)と呼ばれるが、このタイプの意味変化は語義墮落にくらべて頻度が低い(cf. Ulmann (1962:267), Steinmetz (2008:157))。反義化に関して最もよく知ら

れる語は nice である。この語の語源はラテン語の nescius (<ne- 'not' + scire 'know') 「無知の、無能の」で、フランス語を介して借入された。語義向上は英語に借入されてからの発達であり、フランス語の niais は現在も「愚かな」を意味する。この「愚かな」という意味から現在の「よい、すてきな」といったポジティブな意味が生まれたプロセスは、silly タイプの反義化とまさに対称的である。

以上のように、silly タイプの反義化（語義墮落）と nice タイプの反義化（語義向上）はきれいな対称形をなしており、その背後に Saussure (1983 [1916]) が意味変化に対して考えたような体系的な要因が働いているかに思える。したがって、話者の役割を中心にするアプローチをとる本稿の観点からすると、このふたつの変化の対称性の本質を見極めることはきわめて重要である。しかし、残念なことに、紙数の関係上、この小論だけでこの問題に完全な解答を提示することはできない。このため、本稿では silly のタイプの反義化だけに考察の対象をしぼり、この対称性の性質について部分的な説明を行うにとどめざるをえない。後者のタイプについては、稿を改めて論じたい。

### 3. 言語変化の「見えざる手」理論

この節では、反義化の本質についての検討に入る前に、説明の骨子となる言語変化の理論と分析手法について簡単に説明する。Keller (1994) の理論は、言語変化の目的論的なアプローチ (teleological approach) に対する、これまでなされた中で最も根本的なアンチテーゼである。目的論的アプローチとは、文法体系の対称性の維持や言語に生じた「不具合」の修正など、言語変化そのものに何らかの内在的目的 (purpose) または計画性 (design) を認めるアプローチの総称である。これらのアプローチではもっぱら言語体系的な要因が考察の対象とされ、言語変化における話者の役割はほとんど顧みられない。しかし、Milroy (1992: 24) も指摘するように、話者の行動に注目しなければ、言語変化の「発動の問題」(actuation problem)、すなわち個々の言語変化がなぜ起こるのかという問題を解決できない。換言すれば、話者の行動に注目しないかぎり、真の意

味での言語変化の説明とはならないのである。

Keller によれば、言語変化の目的論的アプローチは、言語観の誤りから生ずる。まず初めに、(言語変化を含む)言語現象を自然現象とみなす傾向がある。この言語観は、「自然言語」(natural language)や「自然な変化」(natural change)<sup>3</sup>という術語に端的に見られる。しかし自然現象とは、人間の意志と無関係に生ずる自発的現象と規定されるので、定義上、意図的な行為の結果は自然現象とはみなされない。この基準のもとでは、個々の話者の意図的な行為から生まれる言語現象が自然現象でないことは明らかである。ふたつ目に、言語現象の2重性(duality)がある。言語現象は、個々の話者の個人的行動とそこから生まれるマクロ的構造(文法構造、言語変化など)というふたつの構造がある。それぞれの構造を言語現象の「ミクロ領域」(micro-domain)と「マクロ領域」(macro-domain)と呼ぶ。そして後者は前者の「因果的結果」(causal result)として生ずる。この点はまさしく自明の理といえるが、過去の言語変化の説明の多くは、話者の行動を考慮に入れておらず、この点で片手落ちとのそしりを免れない。

以上のように、言語現象のひとつである言語変化が自然現象ではないことはもはや明らかなが、いっぽうで言語変化が自然現象とみなされてきたのにも理由がないわけではない。というのも、マクロな視点から眺めると、言語変化は人間の意志とは無関係に起こるように見えるからである。じっさい言語変化も通常は話者が計画のうえで意図的に行うものではない。したがって、マクロな視点から見ると、言語変化はあたかも「人間の意志と無関係に生ずる自発的現象」、すなわち、自然現象であるかのようにふるまう。しかしミクロ領域のレベルでは、それは個々の話者の意図的な行動なので、まさに人為的(artificial)というほかはない。要するに、言語変化には自然現象と人為的現象の両面があるということである。

Keller は、この言語変化の両面性こそが、言語変化を研究するうえでの最大の障害となることを指摘した。彼によると、この問題は、事物を「人為的現象」対「自然現象」という二項対立の枠組みの中で捉えようとする人間の認識的傾向に由来する。そこで Keller はこの2項対立を捨てて次の3項対立を提唱する——「人為的現象」対「自然現象」対「中間的現象」である。そして彼は人

為的現象を〈第1種の現象〉(phenomenon of the first kind)、自然現象を〈第2種の現象〉、これらふたつの特性を兼ね備える中間的現象を〈第3種の現象〉と呼んだ。この〈第3種の現象〉とは、Croft (2000: 59) のことばを借りると、「意図的な行為の意図されざる結果」(an unintended result of an intended action)、つまり、意図的な行為の結果でありながら計画的でない現象を指す(cf. Keller (1994: 36), Lüdtke (1989: 132))。言語変化も、個々の話者の意図的な行動が偶発的に生みだす副産物であるという意味で、〈第3種の現象〉のカテゴリーに属する。このタイプの現象のイメージを明確にするため、しばらく言語の問題を離れて、もっと身近な現象——インフレ——について考えてみたい。

インフレとは、物価水準が上昇し相対的に貨幣価値が下落することである。ミクロの視点から考えると、それは個々人の消費傾向の微妙な変化にすぎない。しかし類似した消費傾向が社会に拡大すれば、その累積効果(cumulative effect)により需給の均衡が崩れ、マクロの視点から「インフレ」と呼ばれる状況が生まれる。もちろん個々人の消費活動はインフレを目指したものではなく、そのため当事者には自覚がないのがふつうである。つまり、消費活動は疑いなく意図的だが、インフレの創出それ自体は無意識的になされる。一般にインフレが「自然」に「発生」とみなされやすいのはこのためである。しかし、インフレは個々人の消費活動の「偶発的な副産物」なので、もちろん自然現象であるはずはない。

さて、Keller はこれまで見てきた累積効果を「見えざる手」効果(invisible-hand effect, 以後 IHE)と呼んだ。個々人の行動からインフレのような IHE が生ずるためには、行動にある程度の志向性の一致が生じなくてはならない。そして「見えざる手」とは、類似した状況下、類似した行動原理のもとで、個々人の行動様式に定まった方向性が生じるプロセスを、見えない神の手の働きになぞらえたものである。したがって、〈第3種の現象〉とは、「少なくとも部分的に類似した意図の実現を目指した膨大な意図的行動の因果的帰結」(the causal consequence of a multitude of intentional actions which serve, at least partially, similar intentions)と定義される(Keller (1994: 65))。このような志向性の一致は、ある社会的状況下で、特定の行動原理が働くことから生ずる。Keller は、人

間の行動の背景をなす社会的状況を「生態的条件」(ecological condition), 行動原理を Grice (1975) にしたがって「格律」(maxim) と呼ぶ。

言語変化が〈第3種の現象〉として位置づけられるならば, それは個々人の意図的行動からなるミクロ領域と, その累積的効果として生まれるマクロ領域という2重構造をもつことになる。しかし, この2重構造を念頭においた言語変化の説明はけっして多くない。これはひとえに, 〈第3種の現象〉の構造が難解で, その認識それ自体が人間にとって困難だからである (cf. Keller (1984: 217))。とくに問題となるのは, これらふたつの領域の間の関係である。つまり, 個々の話者の行動がどのような形で語順の変化のような文法システムの変化に結びつくのかという問題である。Keller (1994: 69) はこの点について, マクロ領域の考察は, それを生み出す原因となるミクロ領域の考察とは本質的に——というより存在論的・認識論的に——異なると述べている。要するに, 言語変化をマクロ視点から研究することは, 人間にとってミクロの視点から眺めるのとは別次元の問題に思えるのである。<sup>4</sup> しかし, 上述のように, 顕示化した変化が言語行動の偶発的な副産物だとすると, それは言語変化というプロセス全体からするとほんの氷山の一角ということになる。言い方をかえれば, 顕示化した変化は言語変化そのものではなくその一部にすぎない。したがって, 変化のこの側面にいくら注目したところで, その真の原因を知ることはできない。

まとめると, 「発動の問題」の解決には, 言語変化が言語システム上に——例えば, 語順の変化——として顕在化する以前のプロセス, つまり話者の言語行動に焦点を当てる必要がある。これは本稿が主題とする意味変化についても当てはまる。すなわち, 変化の結果がどれほどシステムティックに見えようとも, 話者の行動の副産物である以上, それはあくまでも偶然の結果にすぎない。Keller の理論では, 発動の問題に答えるためには, ある生態的条件のもとで生ずる志向性の一致とは何か, そしてその背後にどのような格律が働いているかを明らかにしなくてはならない。確認しておくが, 言語変化といっても, ミクロ領域では変化の仕組みそれ自体はいたって単純である。すなわち, 言語刷新 (innovation) とその拡散 (propagation) だけがそのすべてであるといってよい。むしろ話者の行動に共通性を与える生態的条件と格律を特定することこそが

我々の課題なのである。

最後にもう一点、史的言語学における「斉一性原理」(Uniformitarian Principle)の重要性にふれておく必要がある (cf. Milroy (1992), Hopper and Traugott (1993:38), Bauer (1994:7))。これは分析に対する制約である。Labov (1972:275) はこの原理を次のように定義する。

... *the forces operating to produce linguistic change today are of the same kind and order of magnitude as those which operated in the past five or ten thousand years.* ... If there are relatively constant, day-to-day effects of social interaction upon grammar and phonology, the uniformitarian principle asserts that these influence continues to operate today in the same way that they have in the past. (強調は筆者)

もちろん現在と過去では、マスメディアの有無など、社会状況の差異があり、それが言語変化のあり方に影響を及ぼすことも考えられる。しかし、この点にはあえて目をつぶらざるをえない。というのも、この原理を捨ててしまうと、データと調和するかぎり、どのようなありそうもない説明も許されてしまうことになるからである。いっぽう斉一性原理により、現代語に見られる変化との比較が過去の言語変化の解明にとって有効な指針となりうることが導かれる。時代による変化の様式の違いが無視できるほどであるならば、現代語の観察で得られる一般化が、過去の資料の欠如部分——とくに当時の口語についてのデータの欠如——をいくぶんなりとも補うことにつながるかもしれない。これは過去の言語変化について調べるさいにはとても重要な指針である。というのも、Milroy (1992, 1993, 2003) が指摘するように、言語変化の原因にアプローチするためには、まず口語の資料が不可欠だが、そのような資料は入手できない場合が多いからである。本論はこの視点に立って、現代語で得られる一般化を過去の変化の説明に適用するというアプローチを採用する。



#### 4. 説 明

本節では、前節で概説した Keller (1984, 1994, 1995, 1997) の理論 (IHT) を援用し、また歴史資料を用いて、反義化のプロセスを再現してみたい。紙数の関係上、詳しくふれられないが、第2節でふれた egregious などに対しても本節の分析は有効だと思われる。

先ほど論じたように、IHT のもとでは、言語変化の説明は、「ミクロ領域 (話者の言語行動) → マクロ領域 (顕在化した変化)」という順序で分析を進めねばならない (cf. Keller (1994: 69))。また、言語変化の基本パターンは「言語刷新 → 伝播」であったが、言語刷新の伝播が起こる段階で「見えざる手」プロセスが発動されなければ、それが変化として顕在化する (マクロ化する) ことはない。IHE が生ずるためには、生態的条件と格律の相互作用の結果、多数の話者の言語行動に共通の志向性が生じなくてはならない。本節の目的は、生態的条件と格律の相互作用を通じて、話者の行動がどのようなプロセスをへて IHE——「意図的な行為の意図されざる結果」——としての反義化を生み出したかを明らかにすることである。

では、分析を始めよう。紙数の関係上、ここでは主に silly の反義化に的をしぼって議論を行う。上述のように、本稿では、現代語の例との比較を通じて過去の変化を考察するという方法論を採用している。ここで silly と比較する現代語の例は、日本語の〈おめでたい〉である。この語をもち出したのは、もちろん両者の意味や用法、語感の重量が大きい点と、それがもっか反義化の途上にあるとみられるからである。<sup>5</sup> さて、現代語では、〈おめでたい〉はコンテキストによってはとてもネガティブな語感が強い。例えば、〈おめでたい人〉というコロケーションでは、最もネガティブな響きが強いが、元来は「祝うべき、尊い」を意味するポジティブな意味の語である。したがって、この語もポジティブな意味→ネガティブな意味という silly と類似した反義化の道すじを歩んできたことになる。もっとも前者は、「おめでたい日」というように、現在でもポジティブな用法を維持しているという点で silly と異なる。このように〈おめでたい〉がポジティブな意味とネガティブな意味を併せもつという状況は、〈おめ

でたい〉が反義化の途上にあることを示し、また Shakespeare の時代やそれ以前の silly の使用状況を髣髴とさせるという点で参考になる。

さて、〈おめでたい〉には「お人よしな」という語感があり、さらにこれには「馬鹿正直な、単純な、素朴な、思慮に乏しい、騙されやすい」といった含みがある。これらの含みが「愚かな」というネガティブな意味につながることは容易に想像がつくだらう。しかし、いっぽうでお人よしな人は必ずしもネガティブに評価されるわけではない。見方によってはポジティブに解釈されることもありうる。ある意味、これがネガティブな意味とポジティブな意味の境界例であると思われる。したがって、ある時点で、ネガティブ・ポジティブの区別はかなり曖昧になったものと考えられる。筆者はこの価値観の相違から生ずる評価の「ゆれ」が、silly タイプの反義化における重要な要因だと考える。

ここで、IHT にのっとって、silly タイプの語義墮落の社会的背景をなす生態的条件と格律の相互作用について考えてみたい。まずこの発達の生態的条件と考えられるのは、社会の文明化・近代化にともなう話者の社会行動の変化である。社会の進展・文明化につれてポライトネスが行動原理として前景化されてきたことはよく知られている (cf. Ehlich (1992: 83ff))。<sup>6</sup> この過程を通じて、ポライトネスはしだいに行動の規範として社会に定着してきた。その結果、〈おめでたい〉のようなポジティブな語を美辞麗句として用いて他者の顔 (「フェイス」) を立てるという行動様式が行動原理 (格律) として働くようになった。このため、美辞麗句として使われるポジティブな語は、お世辞や儀礼的発話などを通じて、一般的な見地からしてさほど美辞麗句にふさわしくない多様な事物にも拡大使用される傾向がある。この使用域の拡大は、言語普遍性といってもよい人間に共通の行動原理である。じっさい日本語の〈おめでたい〉や〈すばらしい〉といったポジティブな語は、日常生活の中で美辞麗句としてさして立派でない事物に対しても使われる。例えば、たいしたこともない出来事に対して「おめでたい」「すばらしい」といってお世辞をいう場面を想像していただきたい。このような行動様式はポジティブな語の「乱用」ともいえる状況につながり、最終的に語の価値を下落させる。Dik (1989: 42) も指摘するように、ポライトな表現の使用頻度が高まると、それにつれて有標性 (markedness) が

失われるので、結果として美辞麗句としての有用性が低下する。このプロセスはしばしば「意味的インフレ」(semantic inflation) と呼ばれる。<sup>7</sup> これが〈おめでたい〉の反義化の第一段階となる。

この美辞麗句の「乱用」によって、〈おめでたい〉はこの語の使用可能域の境界線上の人物に対しても用いられるようになった。この語はお世辞などを通じて、現在でもそうであるように、「素朴」で「お人よし」なタイプの人物に対しても使われただろう。先ほど述べたように、このタイプの人物は見方によってはポジティブにもネガティブにも解釈されうる。後者の見方をとる者にとって、この人物を指して〈おめでたい〉というのはある種のアイロニーと感じられてもまったく不思議はない。じっさい〈おめでたい奴〉といった表現にはアイロニカルな色彩が強いが、このアイロニカルな解釈はこのような美辞麗句の「乱用」に端を発しているものと考えられる。Gibbs (1994 : Ch. 8) によると、アイロニーは単なるレトリックの手法をこえた思考の1様式であり、ある事物に対する事前の予想と直面する現実の間に隔たりがあるときにアイロニカルな解釈が生まれる。したがって、〈おめでたい〉のポジティブな語感から予想される人物像と適用された対象の間に大きな乖離がある場合、話者本人の発話の意図とは無関係にアイロニカルな解釈が生まれる。じっさい〈おめでたい〉がアイロニカルに解釈されるのは、対象がネガティブな評価を受ける場合に限られる。結婚式で新郎・新婦を指して「おめでたい」といってもふつうアイロニーとは解釈されない。これはアイロニカルな解釈を生みだす予想と現実の乖離が感じられないからである。以上のように、〈おめでたい〉のアイロニカルな解釈の淵源は、この語が「乱用」を通じて、およそ美辞麗句にふさわしくない対象に対して使用されたことに求められる。

さて、このような使用状況が続くと、〈おめでたい〉の使用とアイロニカルな解釈は慣習化によりしだいに結びつきを強め、それがその語の半ば規範的な用法と化していく。さらに規範化が進むと、アイロニカルな解釈は Croft (2000 : 126) が「過少分析」(Hypoanalysis)<sup>8</sup> と呼ぶプロセスをへて語義化 (semanticization) され、〈おめでたい〉の反義化は完了する。ただし上述のように、現在でも〈おめでたい〉がポジティブな意味を保持しているところから

すると、その反義化はいまだ完了状態に至っていないと考えるべきである。

じっさいこのようなアイロニカルな解釈の語義化は通言語的に珍しいものではない。例えば、Stern (1931: 403) によると、ドイツ語の nett 「すてきな」は頻繁にアイロニーとして使われるあまり、現在ではアイロニーであることを示すコンテキストがなくてもアイロニカルに解釈されるに至ったという。また、Bradley (1955 [1904]: 210) によると、sapient 「賢い」は、現在でもポジティブな原義が完全には失われたわけではないが、ほとんど侮蔑語としてしか使われない。これはもっかアイロニカルな解釈が過少分析によって語義化しつつある状況を示していると思われる。〈おめでたい〉についても、ちょうどアイロニカルな解釈の語義化が進行している状況と考えればよいだろう。

では次に、〈おめでたい〉について描いた上のシナリオを silly の反義化に適用し、その意味変化のプロセスを再現する。まずこの用法の変化を文献から読みとることができるかどうか検討してみよう。最初にお断りしておくが、過去の話者の言語行動の変化を実証するには、まず口語の資料が不可欠だが、ME 期や近代英語期には（それにいくぶん近いものはあるとしても）そのような資料は実質的に存在しないといってよい。したがって、以下で述べる分析は文語による状況証拠に基づく推測とならざるをえない。

さて、2 節でみたように、変化の出発点となる OE sǣlig 「幸福な」のポジティブな意味は多かれ少なかれ 15 世紀後半までは維持された。文献資料上は、反義化の端緒はなんとか ME 期まで遡ることができる。この時代には美辞麗句としての用例がより一般的であるが、まだ多くはないとはいえネガティブな用法もすでに登場している。例えば、(3) に示すように、Chaucer は *Troilus and Criseyde* (c1374) のなかで、sely 'silly' を用いて登場人物の死を讃えている。これは sely の美辞麗句としての用法の典型例である。

- (3) O deth, that endere art of sorwes alle,  
 Com now, syn I so ofte after the calle;  
 For *sely* (= 'blessed') is that deth, soth for to seyne,  
 That, ofte ycleped, cometh and endeth payne. (IV, 501-504)

いっぽう (4) の用法は、ネガティブなものとみなされうる。

- (4) And ech of hem with herte, wit, and myght  
 To plesen yow don al his bisynesse,  
 That ye shul dullen of the rudenesse  
 Of us *sely* (= ‘ignorant’) Troians …

さて、〈おめでたい〉を通じて描いた反義化のシナリオでは、まずボライトネスの原理にしたがって美辞麗句の「乱用」が起こり、その結果、silly (を含むいくつかの語の) の価値の下落が起こったとみなしている。(4) のような例を見るかぎりでは、少なくとも ME 期の段階までに silly の使用域は、「乱用」の結果、社会でさほどポジティブな評価を受けない人物にも拡大されていたものと推測される。じっさい (5) に示すように、*The Canterbury Tales* (1400) において *sely* は大工や女中といった一般大衆を指す語と頻繁にコロケートされている。

- (5) a. This *sely* carpenter bigynneth quake (*The Miller's Tale*, 3614)  
 b. Algate this *sely* mayde is slayn, alas! (*The Introduction to the Pardoner's Tale*, 292)

このような例も、*sely* の「乱用」を間接的に示すものとみなすことができる。

ボライトな語は、真に高貴な指示対象ばかりか innocent な人のように、視点によってはポジティブともネガティブともみなされる事物にも適用されることで、美辞麗句としての解釈の「臨界点」に達する。じっさい文献を調査してみると、〈*sely* ‘silly’ + innocent〉というコロケーションの頻度が ME 期以降しだいに高まっている。例えば、*The Canterbury Tales* にもこのコロケーションの例がいくつも見られる。

- (6) a. Greet was the drede and eek the repentance  
 Of hem that hadden wrong suspeciuon

Upon this *sely innocent*, custance (*The Man of Law's Tale*, 680-682)

b. And chiden heere the *sely innocent*, ... (*The Summoner's Tale*, 1983)

c. O *sely preest!* o *sely innocent!* (*The Canon Yeoman's Tale*, 1076)

また, Chaucer の作品中では, innocent な人物として描写される人物に対して *sely* が頻繁に使われている。例えば, 次の (7) の例では, *sely wemen* 'innocent women' は 'full of innocence' であるポジティブな人格として描き出されている。

(7) O *sely wemen*, *ful of innocence*,

Ful of pite, of trouthe and conscience,

What maketh yow to men to truste so?

(*The Legend of Good Women*, III, 1254)

さらに次の (8) の例では, 子供が *sely* によって言及されている。ここでも *sely child* は 'innocent child' という解釈がふさわしい。

(8) For *sely child* wol alday soone leere. (*The Prioress' Tale*, 512)

コンテキストからすると (6)-(8) の例はどれもポジティブな用法とみなすべきだが, 先ほど〈おめでたい〉について論じたように, innocent な事物は観点によって評価が分かれやすい。したがって, これらに類するコンテキストでは, 美辞麗句がアイロニカルな解釈につながる潜在性を秘めている。ただしこのようにして生まれるアイロニカルな解釈の多くは, 故意的なアイロニーというよりは聞き手の側の語用論的推論 (pragmatic inference) によるものと考えられるべきかもしれない。いずれにせよ, このようなコンテキストで *sely* の使用頻度が高まると, Hopper and Traugott (1993) のいう語用論的強化 (pragmatic strengthening) をへて, アイロニカルな解釈の過少分析が促進される。文献を見るかぎりでは, 語義の下落が本格化するの初期近代英語期に入ってからなので, 過少分析を通じてアイロニカルな解釈が語義化されるのは, この時代以

降のことだと考えてよい。

初期近代英語に入ると、ネガティブな用法がしだいに確立され、これと旧来のポジティブな用法が共存する状況が生まれた。そしてネガティブな意味とポジティブな意味の共存が明確化する初期近代英語期こそ *silly* の反義化への最終段階ではないかと筆者は考える。上述のように、*sely* が広範な対象に対して用いられると価値の下落が生じ、いったん価値の下落が起こると、*silly* はかつてのような有用性を失い、ついには美辞麗句として使用されなくなる。ちょうど Shakespeare の作品にこの状況を見てとることができる。彼の作品中にはまだポジティブな用法が残されていたが、もはやそれは美辞麗句とは理解されない。例えば、*Twelfth Night* から引用した (9) では、*silly* はまだかろうじてポジティブな意味を保持している (*silly sooth* は「素朴な真実」ほどの意) が、この用法は美辞麗句というにはほど遠い。

- (9) And the free maides that weaue their thred with bones do vse to chaunt it:  
it is *silly* sooth, and dallies with the innocence of loue like the old age.  
(2.4. 905)

この時代の *silly* の置かれた状況は、現在の〈おめでたい〉の置かれた状況に近いものと思われ、後者の使用状況を通じて明確にイメージすることができる。<sup>9</sup>

次に、このシナリオでは、過渡期の *silly* が〈おめでたい〉と同様、アイロニカルに解釈されたことになるが、この点はどうだろうか。(4)-(5)のような例はその有力な候補だが、<sup>10</sup> 先行研究でも、この変化をアイロニーという観点から論じているものは少なくない。例えば、Bradley (1955 [1904]: 209-210) は *silly* の発達について次のようにコメントしている。<sup>11</sup>

Sometimes, though not very often, a word has been so commonly employed in ironical language that *its original meaning has been actually reversed* ... An instance in which a sense originally ironical has caused the favourable sense to be forgotten is afforded by *silly* ... In Middle English it was often *used satirically in a tone of mock envy*

*or admiration*, and hence acquired the disparaging sense which it now has. (強調は筆者)

いっぽう Stern (1931: 403) は silly の発達をアイロニーによるものではないと考える。じっさい silly の意味発達をより詳しく調べてみると、アイロニーを用いた分析から予測されるように、'blessed, pious, holy, good' の意味から一足飛びで 'foolish' という意味が生まれたわけではない。上述のように、その中間段階として、'innocent' という意味が介在している。Stern は、silly の発達の分水嶺となるのは 'innocent' の段階で、純粹で無邪気な人は憐れみの眼差しで見られがちなので自然に 'foolish' の意味を発達させたと考えた。この説明は、PE の innocent それ自体に、I was so *innocent* that I didn't know anything のように、「無知の」「愚かな」といったネガティブな意味があることから理解しやすい。

しかし、筆者は、必ずしも Bradley (1955 [1904]) の主張と Stern (1931) の主張がまっこうから対立するものとは考えない。まず、silly に 'innocent' の意味が生まれたことは、silly の使用対象が 'innocent' な対象にまで拡大されたことを示している。先に述べたように、これは美辞麗句の「乱用」の一環である。ここで重要な点は、'innocent' と称される人物は、観点によりポジティブにもネガティブにも評価されうるため、使用者の意図とは無関係に容易にアイロニカルな解釈へとつながるということである。つまり、Bradley が暗に示唆するように、'blessed, pious, holy, good' の意味からじかに 'foolish' という意味が生まれたという考えは不適切としても、それだけで silly の反義化にアイロニーが関与していないことにはならない。むしろ筆者の考えでは、silly が innocent を現わすようになったことがアイロニカルな解釈を生む最大の要因である。先ほど指摘したように、PE の innocent が頻繁にアイロニカルに解釈されることも、かつて 'innocent' を意味した silly がアイロニカルに解釈されえたことの間接的な証拠となるだろう。

筆者の考えでは、このアイロニカルな解釈は、もとは語のもつ含意（または語用論的推論）であったものが、語義化の道を辿ったものである。すなわち、silly にネガティブな意味が語義化するに先立って、先ほどふれた現代語の nett



や *sapient* と類似した発達プロセスが起こったと考えるのである。ME 期から初期近代英語期にかけてしだいにネガティブな用法の頻度が高まり、逆に美辞麗句としての使用頻度が低下していく様子は、まさにこのように考えれば理解できる。

さて、以上のように、*silly* が語義墮落によって反義的な意味を発達させたプロセスは、IHT を用いて説明することができる。まず、社会の文明化を通じて儀礼的な言語使用が社会に広く浸透したことが生態的条件となり、その結果、ポライトネスの原理が話者の行動原理（格律）として定着する。こうした社会状況を背景として、社会にお世辞や儀礼的発話など美辞麗句を「乱用」する傾向が強まり、その意図されざる累積効果——すなわち、「見えざる手」効果（IHE）——としての語義墮落が起こった。さらにこれに人間の認知的傾向が加わって、〈*silly* + *innocent*〉のようなコロケーションからこれも偶発的にアイロニカルな解釈が生まれ、過少分析を通じて語義化したものが *silly* のネガティブな意味となった。これが本稿の提案する *silly* の反義化プロセスのシナリオである。なお次に述べるように、*silly* がポジティブな意味を失ってネガティブな意味に特殊化され、反義化が完了した理由もやはり IHT によって説明できる。

上述のように、*silly* がネガティブ・ポジティブ両方の意味で使われた段階で、「乱用」による「意味的インフレ」により、すでにこの語は美辞麗句——ポライトな表現——としての有効性を失っていたものと考えられる。すなわち、この語がお世辞や儀礼的発話などを通じて広く様々な種類の対象に使われるようになると、価値の下落が起こり、本来その語に値するはずの真にポジティブな価値をもつ対象については使用が憚られるようになったのである。これは現代の日本語で〈おめでたい〉があまり美辞麗句として使われない状況と似ていなくもない。ポライトネスの社会的重要性の向上、そして *silly* のおかれた言語状況が生態的条件となり、またこの場合もポライトネスの原理が話者の言語行動の格律となって、その IHE として大多数の話者が *silly* を美辞麗句として用いることを控えるようになったものと思われる。じっさいネガティブな意味とポジティブな意味が共存した Shakespeare の時代においても、すでに *silly* は美辞麗句として用いられることはなかった。ネガティブな用法が社会に蔓延する

と、いつしか話者はさほどポジティブでもない対象に対してさえ美辞麗句としての silly の使用を憚るようになり、ついにポジティブな用法は廃れたのである。文献資料を見るかぎり、これは初期近代英語期——とりわけ 16 世紀前後——以降に起こった発達である。

最後にもう 1 点、silly においてアイロニカルな解釈が最終的に消失した理由についてはどうだろうか。これはポジティブな意味が廃用になったことと深い関係があったものと思われる。アイロニーとは、嵐の日に「今日はいい天気だね」というときのように、ポジティブな語義と現実の乖離から生まれる解釈なので、アイロニカルな解釈はポジティブな語義の存在を前提とする。したがって、ポジティブな語義が失われてしまうと、もはやそこにアイロニカルな解釈は生じえない。こうして Bradley (1955 [1904]) が先の引用で述べるように、silly は純然たるネガティブ語となったのである。

## 5. まとめ

この小論では、筆者が便宜的に「反義化」と呼んだ現象を、Keller (1984, 1994, 1995, 1997) の提唱する「見えざる手」理論 (IHT) による説明を試みた。IHT では、まず話者の行動というミクロ領域の事象に注目し、それがどのように言語変化というマクロな事象へと発展するかを考察することで言語変化の説明がなされねばならない。言語行動の社会的・言語的背景をなす生態的条件、そして話者の行動原理をなす格律を明らかにすることによって、いかにして個々の話者の行動が言語変化につながったかという問題——発動の問題——に光をあてることが可能となる。しかし、古い時代の変化については、言語変化の舞台となる口語のデータが入手できないことが多い。このデータの不足を補うため、本論では、斉一性原理に訴え、現代語の観察から得られた所見を活用した。これらの見解に基づき、また文献資料の調査を通じて、本稿では silly タイプの反義化が話者の言語行動とその社会的・認知的背景の相互作用から生ずる「見えざる手」効果 (IHE) であると主張した。

## 注

<sup>1</sup> この「反義化」という呼称は、あくまでも便宜的なもので、理論的に有意義なカテゴリーを指すものでないことをあらかじめご了解いただきたい。ちなみに、後述のように、silly のタイプの「反義化」は正式には「語義墮落」と呼ばれる意味変化の 1 例であるが、語義の墮落の程度は千差万別で、必ずしも反義的な意味を発達させるわけではないので、本稿では特別に「反義化」という術語を設けて silly タイプの語義墮落を他のものと区別することにした。

<sup>2</sup> ただし Mayhew and Skeat (1888: 202) も *Middle English Dictionary* も、silly のネガティブな語義をあげていない。しかし第 4 節で指摘するように、Chaucer の作品中には、ネガティブに解釈できるものは少なくない。したがって、おそらく寺澤 (1997) があげるネガティブな意味の出現時期 (16 世紀) は、その意味が十分に定着した時期を示すものだろう。

<sup>3</sup> これは Trudgill (1983) の用語で、言語接触 (language contact) によらない変化を指す。

<sup>4</sup> しかも Keller (1984) によると、〈第 3 種の現象〉は偶発的な産物でありながら、高度に構造化され、見たところ綿密な計画に基づくように見えるものが多く、この特性も人間の判断を誤らせる原因となるという。これにより観察者はついつい〈第 3 種の現象〉に対して何らかの「目的」や「計画性」(design) を考えたくなる誘惑にかられる。その意味では、〈第 3 種の現象〉たる言語変化に対して頻繁に目的論的な説明がなされるのもうなずける。

<sup>5</sup> Bradley (1904) の翻訳を手がけた寺澤芳雄氏も、訳書『英語発達小史』(岩波文庫、1982 年) の訳註 (p. 319) で、silly の発達は日本語の〈おめでたい〉と比較されると述べている。

<sup>6</sup> ポライトネスの概念については、Brown and Levinson (1987) を参照。

<sup>7</sup> この呼び名は「乱用」によって意味変化が起こり、語の価値が暴落するプロセスをインフレ (貨幣価値の暴落) になぞらえたものである。

<sup>8</sup> Croft (2000: 126) の定義によると、過少分析とは、聞き手がコンテキストから生まれる意味・機能を関連する表現の内在的特性として再分析することを指す。要するに、会話の含意や含み、メタメッセージといった、ある表現のコンテキストにおける解釈が語義化によってその表現の内在的意味となることである。

<sup>9</sup> 筆者が Shakespeare の劇 (34 作品) および詩 (4 編) に見られる silly の用法を調査したところ、派生語 (silliness) も含めて 25 例あり、そのうち明確にネガティブな解釈をもつとみられるものが 15 例 (56%) あった。

<sup>10</sup> Benson (1987: 846) は、(5) のような例をアイロニカルに解釈するべきだとの見解をいくつか紹介している。

<sup>11</sup> Bradley (1955 [1904]: 209) は、第 2 章でふれた egregious 「ひどい」も、アイロニーによる反義化の例としてあげている。Steinmetz (2008: 60) や寺澤 (1997: 417), Stern (1931: 402) も同様の見解を示している。

## 参考文献

- Bauer, Laurie (1994) *Watching English Change*. London: Longman.
- Benson, Larry D. (1987) *The Riverside Chaucer*. (New ed.) Oxford: Oxford University Press.
- Bradley, Henry (1955 [1904]) *The Making of English*. New York: MacMillan.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William (2000) *Explaining Language Change*. London: Longman.
- Dik, Simon (1989) *The Theory of Functional Grammar I*. Dordrecht: Foris Publications.
- Ehlich, Konrad (1992) On the Historicity of Politeness. In *Politeness in Language*. Eds. by Richard J. Watts et al., 71-107. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gibbs, Raymond W. (1994) *The Poetics of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, Paul H. (1975) Logic and Conversation. In *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Eds. by Peter Cole and James L. Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- Gvozdanović, Jadranka (ed.) (1997) *Language Change and Functional Explanations*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hoch, Hans H. and Brian D. Joseph (1996) *Language History, Language Change, and Language Relationship*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keller, Rudi (1984) Towards a Theory of Linguistic Change. In *Linguistic Dynamics: Discourses, Procedures, and Evolution*. Ed. by Thomas Ballmer, 211-237. Berlin: Mouton

- de Gruyter.
- Keller, Rudi (1994) *On Language Change*. London: Routledge.
- Keller, Rudi (1995) The Epistemic *Weil*. In *Subjectivity and Subjectivisation*. Eds. by Dieter Stein and Susan Wright, 16-30. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keller, Rudi (1997) In What Sense Can Explanations of Language Change Be Functional? In Jadranka Gvozdanović (ed.), 9-20.
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Lass, Roger (1980) *On Explaining Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lewis, Robert E. (1987) *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Lüdtke, Helmut (1989) Invisible-hand Processes and the Universal Laws of Language Change. In *Language Change*. Eds. by Leiv Breivik and Ernst Jahr, 131-136. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mayhew, A. L. and Walter W. Skeat (1888) *A Concise Dictionary of Middle English*. Oxford: Clarendon Press.
- Milroy, James (1992) *Linguistic Variation and Change*. Oxford: Basil Blackwell.
- Milroy, James (1993) On the Social Origins of Language Change. In, *Historical Linguistics: Problems and Perspectives*. Ed. by Charles Jones, 215-236. London: Longman.
- Milroy, James (2003) On the Role of the Speaker in Language Change. In *Motives for Language Change*. Ed. by Raymond Hickey, 143-157. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mufwene, Salikoko S. (2001) *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mufwene, Salikoko S. (2008) *Language Evolution: Contact, Competition and Change*. London: Continuum International Publishing Group.
- Romaine, Suzanne (1994) *Language in Society*. Oxford: Oxford University Press.
- Saussure, Ferdinand de (1983 [1916]) *Course in General Linguistics* (translated by Roy Harris). London: Gerald Duckworth & Co Ltd.
- Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. (Two Vols.) New York: Dover Publications, Inc.
- Steinmetz, Sol (2008) *Semantic Antics*. New York: Random House Reference.

- Stern, Gustaf (1931) *Meaning and Change of Meaning*. (Reprint.) Westport, Connecticut: Greenwood Press, Publishers.
- 寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』東京：研究社。
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trudgill, Peter (1983) *On Dialect*. Oxford: Basil Blackwell.
- Ullmann, Stephen (1962) *Semantics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Wells, Stanley and Gary Taylor (1986) *William Shakespeare: The Complete Works* (Original-spelling Edition). Oxford: Clarendon Press.

## Synopsis

## Antonymization and Pejoration

Mitsuru Maeda

As Bradley (1955 [1904] : 209) puts it, there are cases of semantic change where a word's "original meaning has been actually reversed." In such cases, since the original meaning of a word is reversed, I will refer to this type of change as "antonymization."

The most celebrated examples of this in the history of English are *silly* and *nice*. The former derives from OE *sælig* (cf. OHG *sālig*) 'happy, blessed good,' a word of high value. In Present-day English, *silly* only means 'foolish' and it shows no trace of this positive meaning. This pattern of change is generally called "pejoration." By contrast, *nice* stems from a loanword with a very negative meaning, i.e. Latin *nescius* 'ignorant' or French *nice* 'stupid.' In the course of history, its negative value disappeared and it gained a positive one as it has today. This pattern of change is the reversal of pejoration, and is usually called "amelioration." The patterns shown by *silly* and *nice*, then, are symmetric to each other, which might seem to one to be very regular and orderly because of this symmetry.

The primary purpose of this paper is to explain why the reversal of meanings occurs at all, by analyzing and reconstructing the developmental courses of *silly* and some others. I cannot treat the *nice*-type antonymization for the limitation of space, and I have to relegate it to my future study. Therefore, this brief study should be understood as a partial attempt at explaining the symmetrical development of *silly* and *nice*. My contention is that the developmental course of *silly* is a result of the interaction of various extralinguistic factors, of which politeness is the most important.

In this paper, I will adopt Rudi Keller's (1984, 1994 1995, 1997) Invisible-hand Theory as an explanatory framework. I have chosen this theory, not because it enables us to construct an elegant theorizing of the

phenomenon, but because it permits us to cast a light on the role of speakers in language change. As Milroy (1992) argues, the actuation problem, i.e. a question of why a particular change occurred, cannot be solved without taking the activities of speakers into account. In this spirit, I attempt to construct a speaker-oriented, invisible-hand explanation of the *silly*-type antonymization.